

ホッブズにおける学問的方法論の意義

吉 田 達 志

人文社会教室

(1984年9月7日受理)

Thomas Hobbes: The Significance of his Methodology of Science

Tatsushi YOSHIDA

Department of Humanities

(Received September 7, 1984)

Hobbes says in his work *Leviathan*: By philosophy is understood the knowledge acquired by reasoning, from the manner of the generation of any thing, to the properties: or from the properties, to some possible way of generation of the same; to the end to be able to produce, as far as matter, and human force permit, such effects, as human life requireth. By which definition it is evident, that we are not to account as any part thereof, that original knowledge called experience, in which consisteth prudence: because it is not attained by reasoning, but found as well in brute beasts, as in man; and is but a memory of successions of events in times past, wherein the omission of every little circumstance altering the effect, frustrateth the expectation of the most prudent: whereas nothing is produced by reasoning aright, but general, eternal, and immutable truth.

The aim of this paper is to consider the significance of Hobbes' methodology of philosophy which is based upon the right definition and reasoning.

一. 序

ホッブズは、推論を経験的推論¹⁾たる慎慮 (prudence) と理性的推論 (ratiocination) との二つに明確に区別することの必要性和、後者の前者に対する優越性を強調している。前者は人間の経験という次元の中に生まれ、経験の範囲内で営まれる。後者は科学ないしは哲学と呼ばれ、経験を越えた理性という次元に基礎を置き、理性を媒介して営まれる。両者の間には、一見して深い断絶が見られる。

ところで、ホッブズによれば慎慮は不確実なものである。なぜならば、結果を変更しうるあらゆる条件を経験によって観察し、回想することは不可能だからである。これに対して、ある人があるものごとについての真理を他人に向って明瞭に論証しうる場合には、科学ないしは哲学は確実無謬なものであると言いうるのである²⁾。ホッブズは、『リヴァイアサン』の第四部、「暗黒の王国について」の箇所で、「哲学という時に理解されるのは、あるものの生成の仕方からそのものの諸特性へ、或いは諸特性からそのものの生成についての可能な方法への、推論によって獲得された知識のことであって、その目的は物質と人間の力が許す限り、人間生活が必要とする諸結果

を生み出しうるようにさせる点にある³⁾」と哲学の定義を要約した後、更にこの哲学の立場から、慎慮は哲学の一部には入らないと、慎慮を批判している。「この定義から明白なことは、慎慮がそこに根を置く経験と呼ばれる本源的な知識を、我々は哲学の一部分に数えるべきではないということである。なぜならば、それは推論によって到達されるものではなく、人間の中と同じように獣の中にも見出されるものであって、それは過去の出来事の継続についての記憶に外ならず、そこではいずれのとりにも足りない事柄についての記憶が欠けても、そのことが結果を変えて、最も慎慮ある人の予想すら裏切るからである。これに反して、推論からは間違いなく一般的、永久的で、不変の真理だけが生み出されるのである⁴⁾。」

こうして、ホッブズにあっては慎慮は不確実な知識であるという理由で哲学から排除されるが、同様な理由に基づいて、誤まった教義、超自然的啓示による知識、それに著作家達の評判をあてにし、そこから引き出された知識もまた、哲学から排除される。

このような確実な知識としての科学ないしは哲学はどのようにして発見され、何を目的とし、何に基礎を置いて樹立されたのであろうか。この点に関しては、ホッブズの著作『市民論』を通して簡単に考察して見よう。

ホッブズにおける科学ないしは哲学的方法的特徴は、

「すべての自然科学の母である幾何学⁹⁾」の圧倒的な影響を受けている点にある。つまり、幾何学は正確な定義と正確な推論に依拠する最も精密な科学なのである。幾何学の依拠するこの方法が、ものごとの因果関係、即ちものごとの原因と結果の連鎖を探るという目的に適用されるのである。

定義と推論の正確さに基づく幾何学の確固不動の方法が、政治的領域における人間の行為の因果関係の連鎖についての解明に応用されると、そこには政治科学ないしは政治哲学が誕生する。従って政治科学ないしは政治哲学は、それが人間の恣意によって勝手に動かされえない厳密な知識として成立するためには、ものごとの因果関係の連鎖についての解明への旅において、その出発点、経路、到達点に到る各要素が正確な定義に基づいて正しく確定され、正確な推論に基づいて正しく配列されなければならない。言い換えるならば、正確な定義によって先ず原因を確定要素——ホッブズはこれを原理(principle)と呼ぶ——として決定し、正確な推論によって確定要素間の因果関係を論証するということである。そして、要素の確定化とは同時に要素の数量化を意味していて、計算能力としての理性がすべての確定要素を量的なものとして捉えて、計算を、即ち推論をすすめていくのである。

この原因と結果についての因果関係の探究において、原因を確定要素、即ち原理として決定する作業は、実は、むしろ結果から原因を予め発見するという作業を前提に行われる。なぜならば、「すべてのものは、それを構成する原因によって最もよく理解される⁶⁾」のであって、それには「あたかもそれらのものが失われてしまっていると考えることが必要である⁷⁾」からである。それは丁度「時計とか、或いは何かそのような小さな機械においては、それがバラバラにされ、分解して調べられないならば、歯車の素材、形体、運動はよく分らない⁸⁾」のと同じことである。こうして、ある結果からある原因へと流れを逆に遡ることによってその原因を確定要素＝原理として確定し、今度は確定された原因＝原理から正確な推論に基づいて確固たる結果＝原理へと流れを辿ろうというのである。

このようにして確定され、発見された原理は、誰も疑うことのできない、ただそのまま受け入れる外はないような性格を有しているのであって、第一義的には経験的事実に基づく証明を必要としない。また、それは理性に基づくいわば思考実験の結果、知られ、獲得されたものであるから、自然科学におけるような仮説を実験に基づいて証明するという方法は適用されない。その理由は、ホッブズにおける科学ないしは哲学が、自然科学的事実の発見を目的とする知識として成立することを求めているのではなくて、事実から事実への関係を明らかにする

知識として成立することを求めているからである。つまり、それは可能性についての知識であるとも言える。

ホッブズによれば、正確な推論は正しい理性(right reason)を行使することによってなされるのであって、これが政治科学ないしは政治哲学を成り立たせる。正しい理性——それは理性的推論のことであるが——についてのホッブズの定義を示そう。

「自然状態における人間の正しい理性を、私は多くのの人々と違って、絶対確実な能力のことではなく、推論という行為のことであると理解している。それは自分の隣人に対して損害か利益かの、どちらかの影響を及ぼす行為についての、各人の有する特別の、真の理性的推論のことである。私はそれを特別のと呼んだが、その理由は次の通りである。つまり、政治的支配においては至高者の理性、従って市民法が個々の臣民によって正しいものと受け取られるべきであるけれども、この政治的支配が存在しないならばそのような状態においては誰も正しい理性を誤まった理性から区別することができないが故に、正しい理性を自分自身の理性と比較することによって、各人の理性が自分自身の行為(それは自分の危険を賭してなされるが)の規則であるばかりでなく、自分に関係のある事柄においては他人の理性の尺度ともなると見なすからである。更に、正しく構成された原理から結論づけられているから私はそれを真のと呼ぶ。その理由は、自然法に対する侵害は誤まった推論から、或いはむしろ、自分自身を保存するために他人に対してどうしても遂行しなければならない義務を理解しようとはしない人々の愚かさから生ずる点にある⁹⁾。」

このように見てくれば、慎慮とは各個人の理性、即ち各人によって私的に行使される理性を意味するにすぎず、それは理性的推論が備えている公共性という普遍的性格を備えてはいないことが理解されるのである。

さて、ホッブズによれば人間は技術(art)によって自然を模倣し、人工的動物(例えば時計のような自動機械)を作り出すという。更に、人間は技術によって自然のうちで理性的で、最も優れた作品である人間を模倣し、人工的人間たる国家(state)を創造することが可能であるという。そして、この人工的人間たる国家の素材(matter)と製作者(artificer)とは共に人間自身であるという。つまり、人間は技術を確立し、技術を用いることによって人間を素材とし、人間を製作者として国家を創造するというのである¹⁰⁾。この技術が一回限りのものとしてではなく、いつでも人間によって採用しうるものとなるためには、換言すると普遍的に適用しうるものとなるためには、技術は慎慮によってではなく、科学ないしは哲学によって裏付けられていなければならない。つまり、技術は正確な定義と推論に基づく科学ないしは哲学に裏打ち

されることによって初めて、その揺るぎぬ確実性を、従って普遍性を獲得するのである。こうして、人間を素材とし、人間を製作者として国家を創造する一連の技術過程は、正確な定義によって確定された、何人も疑いぬ原理と正確な推論を適用することによって押し進められていくということになる。

この技術が使用される目的は、平和という状態を構築することにある。そしてこの場合、その前提作業として、一定の秩序が失われてしまったと仮定する思考実験によって平和を阻害する原因が探究される。いかなる原因が平和の攪乱という結果をもたらすのか。こうしてホッブズは、平和を妨げる直接的原因を正義をめぐる人間の闘争に見出し、更にその究極的原因を人間の本性のうちに潜む闘争への意志に見出し、それを原理として確定した。こうして確定された原理を出発点とし、確固たる平和という原理を到達点として正確な定義と推論に基づく論証が展開されていくが、その間の経路における各原理は、暴力による死の危険から免れて生命の安全を確保するためにはいかなる手段が必要であるか、ということを考えてしながら確定されていくのである。

ところで、この章の冒頭に述べたように慎慮と理性的推論との間には、深い断絶ないし乖離がある。それは、ホッブズという知的に優れた人物はともかくとして、一般の平凡な人々は必ずしも理性的推論を自家菜籠中のものにすることはできないということの意味している。なぜならば、「我々は日々経験によって、あらゆる種類の人々の中に、食べることと安楽に暮すことだけに腐心しているような人々は、不合理なことを検討する労をとるよりも、むしろ不合理なことを信じて満足しているのを見る¹¹⁾」からである。ところが、他方においてホッブズは、慎慮に身を委ねてしまっている一般の人々が努力によって理性的推論を身につけうる可能性を承認している。ここにまた、困難な問題が発生する。つまり、一般の人々は本当に経験的推論たる慎慮の次元を脱して、理性的推論の次元へと飛び立っていくことができるのか、もしもそれが可能であるとしたならば、そのための条件とは何なのかという問題である。

私のこの小論の目的は次の四点にある。第一に、ホッブズが人間の思考を吟味することによって人間の認識能力をどのように把握しているのかを、換言すると経験的推論たる慎慮の不確かさとその狭隘性、それに対する理性的推論の確さとその普遍性、そして後者の前者に対する優越性を検討することである。第二に、理性的推論に基づく論証過程を自然状態を中心にして具体的に追跡することである。第三に、経験的推論の世界を理性的推論の世界へと架橋させる要因とは何なのか、即ち人間の経験の中にありながら経験を越え出させていくような性格

をもったものは、どのような人間の能力なのかを明らかにすることである。最後に第四に、ホッブズは彼の政治科学ないしは政治哲学を実践に移し、人々に受け入れて貰うためにどのような具体的方策を提案しているのかを明らかにすることである。

二. 理性対経験

ホッブズは、正確な定義と推論に基づく理性的推論の立場から人間の認識能力を分析する。この作業は、理性的推論による経験的推論たる慎慮への批判という形をとってすすめられていくが、それは前者によって後者を克服し、確実な知識に依拠する学問（即ち科学ないしは哲学）を樹立しようとする努力の表れである。ホッブズはまず、人間の思考を吟味することから始める¹²⁾。

思考は単独なものとしての観点から、次いで思考の系列の、即ち思考の相互依存関係の観点から考察される。単独なものとして考察された場合、思考とは外部の物体、即ち対象の偶有性の表象 (representation) である。つまり、この対象は人体の感覚器官に作用し、圧力即ち運動を与えることによって様々な表象を生み出す。従って、感覚の原因は対象にあり、「人間は感覚に作用していないものを表す思考をもつことはできない¹³⁾」のである。こうして、心に浮かぶ概念はすべて感覚器官に生じたものであるから、結局あらゆる思考の起源は感覚にある。思考の系列とは思考が次々に継起することを指すが、あらゆる思考は無差別にあらゆる思考に継続しているわけではない。この思考の系列には二種類あって、第一のものは、はっきりした企図によって支配されていないから不定なものであり、第二のものは、ある意欲や企図によって規制されているから恒常的なものである。

規制された思考の系列には二種類ある。一つは、構想されたある結果について我々がそれを生む原因や手段を探す場合であって、これは人間及び動物に共通なものである。もう一つは、何かあるものを構想して我々がそれによって生じさせられうるあらゆる可能な結果を探す場合、即ち我々がそれを所有したならばそれによってなしうることを構想する場合である。これは好奇心 (curiosity) と呼ばれるべきものであって、人間にだけ特有なものである。こうして、規制された思考とは探究 (seeking) に外ならず、これは現在または過去のある結果の原因を、或いは現在または過去のある原因の結果を追究することなのである。

人間はある行為の結果を知ろうとして何か過去のそれに類似した行為とそれの結果とを次から次へと考えるが、それは彼が類似の行為には類似の結果が付随するであろうと想定しているからである。この種の思考が慎慮とか、

予見 (foresight) とか、知恵 (wisdom) とか呼ばれる。慎慮という推論は、我々が豊富な経験を有していれば確実性を増し、時には結果が予測に合致する場合もあるが、それでも十分な確実性を有しているわけではない。慎慮は過去の経験から抽出された未来についての推定 (presumption) にすぎない。同様に、過去のものごとについての推定が未来ではなく、同じく過去の他のものごとから抽出されることもあるが、そうした推定は不確実なものである。それは、どちらの場合も、経験にのみ基づいているからである。

慎慮は人間と動物の双方によって共有されているものであるが、人間にのみ固有な推論の能力、即ち理性的推論は研究と努力に基づいて後天的に獲得されるものである。そして、人間を他のすべての生物から区別させるほど高次の段階にまで進歩させたこの新しい人間の能力は、言葉の発明によって生じたものである。こうして、今や我々は理性的推論がいかんして獲得されるのかという問題に到着した。そこでは、名辞及びそれらの結合からなる言葉 (speech) の意義が高く評価されている。

人間は言葉を発明したが、言葉の一般的効用は我々の思考の系列を語 (words) の系列に移すことにあるのであって、その目的の一つは、我々の思考の連続を記録することによって思い出すための苦労を省くためであり、もう一つは、多くの人々が同じ語をその結合と語順によって、彼らがそれぞれの事柄について何を考えているかを相互に表わすためである。更に言葉の特殊な効用は第一に、思考活動によって我々が現在または過去のものごとの原因であると認めたもの及び現在または過去のものごとが結果としてもたらすであろうと認めたものを記録すること、第二に、我々が既に得ている知識を他人に示して相互に助言し、教えること、第三に、我々の意志と目的とを他人に知らせて、我々が相互に助け合えるようにすることである。

言葉が原因と結果の連続についての回想に役立つのは、名辞 (names) の付与とそれらの結合とによる。名辞の付与によって我々は、構想されたものごとの論理的帰結に関する計算を名辞の論理的帰結に関する計算に転化する。つまり、一つの特殊な事例において見出された帰結を普遍的法則として記録し、回想することによって、ここで現在真実であると発見されたものをすべての時と所においても通用する真実たらしめるのである。二つの名辞が結合されると、それは帰結または断定となる。そして、真偽は言葉の属性であって、ものごとの属性ではないから言葉のないところには真実も虚偽も存在しない。従って、真実とは我々が断定する際に諸名辞を正確に配列するか否かに懸っているということになる。以上のことを要約すると、理性的推論は次のように定義される。理性

的推論とは我々の思考を記号づけ、表わすために協定された一般的諸名辞の連続についての計算に外ならない。記号づけるというのは、我々自身で計算する場合であり、表わすというのは、我々の計算を他人に示し、証明する場合である。理性的推論は感覚や記憶のように我々に生まれつきのものではなく、また、慎慮のように経験だけによって獲得されるものでもなく、努力によって獲得される。つまり、それは第一に、適切な名辞の付与によって、第二に、優れた整然とした方法を得ることによって、名辞から出発してそれらのうちのあるものと他のものとの結合から作られる様々の断定に達し、それから一つの断定と他の断定への結合たる三段論法に達し、遂に我々が当面の問題に関するすべての名辞の連続関係についての知識に到達するという努力によって獲得されるのである。こうして獲得されたものが科学 (science) なのである。

慎慮と科学ないしは哲学とは明確に区別されなければならない。慎慮は過去の取り消しえないものごとたる事実についての知識に外ならないのに対して、科学ないしは哲学は一つの事実の他の事実への連続と依存関係についての知識なのである。我々は科学ないしは哲学によって、自分が現在なしうることから何か他のことを他の時にしようと思ったりする場合に、いかにそれをなしたらよいのか、その実現可能性を知る。なぜならば、我々があるものごとがいかなる原因によって、また、いかなる仕方でもどのようにして生ずるかを知るならば、類似の原因が我々の力の支配下に入ってきた場合に、どうしたらそれと類似の結果を生じさせようかということが分るからである。

しかしながら、我々が一般的な意味をもつ語に基づいて推論し、間違った一般的結論に達した場合、それは普通には誤謬と呼ばれているが、実はそれは背理 (absurdity) と呼ばれるべきであって、背理を犯す原因は、推論を正確な定義から出発させて展開していない点にある。

さて、理性的推論の立場から人間の善悪の問題を分析すると次のようになる¹⁾。

動物には二種類の運動がある。運動には生物的代謝を意味する生命的運動と人間が予め心に想像した通りに行う動物的運動とがあり、後者は意志的運動とも呼ばれる。この意志的運動はそれに先行する「どこへ」、「いかにして」、「何を」という思考に依存しているから、想像がすべての意志的運動の最初の内的な発端である。最初の発端は努力と呼ばれる。この努力がそれを惹き起こすものに向う時には欲求と呼ばれ、また、努力があるものから離れようとする時には嫌悪と呼ばれる。欲求は経験から、更には予見から生ずる。そして、人間の体質は絶えず変化しているから全く同じものが常に同じ欲求や

嫌悪を惹き起こすことはできないし、ましてや同じものに対する欲求においてすべての人々が一致するということはありえないから、ある人の欲求の対象がその人にとって善であり、嫌悪の対象がその人にとって悪である。換言すると、善悪という言葉は常にそれを用いる人との関連において使用されるものであって、絶対的な善だとか、絶対的な悪だとかいうようなものは存在しないし、また、善悪の一般的規準というものも存在しない。生命活動を助長し、強化するものが欲求であり、それが善となる。生命活動を妨げるものが嫌悪であり、それが悪となる。欲求と嫌悪はその具体的な表れ方に応じて様々な名辞をもつが、これらの名辞は情念という名辞の下に統括される。

人間の心の中に同一のものごとに関する欲求と嫌悪が交互に生じて、ものごとが行われるまで、或いは不可能と考えられるまで継続する欲求、嫌悪の総計は熟慮 (deliberation) と呼ばれる。そして、人間と同様、獣もまた熟慮する。熟慮において行為、或いはその回避に直接継続する最後の欲求または嫌悪は、我々が意志と呼ぶもの、即ち意志するという行為である。つまり、意志に熟慮における最後の欲求である。

ところで、善悪に関する熟慮の際に交互に起こる欲求に当るものは、過去及び未来についての真理の究明に際しては交互に起こる意見 (opinion) がそれである。熟慮における最後の欲求が意志と呼ばれるように、真理の究明における最終の意見は判断 (judgement) と呼ばれる。そして、善悪に関する問題において交互に起こる欲求の全連鎖が熟慮と呼ばれるように、真偽に関する問題において交互に起こる意見の全連鎖は疑問 (doubt) と呼ばれる。けれども、いかなる論究も絶対的知識として終結することはできず、条件的知識としてしか終結することができない。つまり、論究によっては、もしもこれがあんならばあれがあり、これがあつたならばあれがあつたのであり、これがあるだろうとすればあれもあるだろうという具合に条件的にしか知りうるにすぎないし、また、あるものと他のものとの関連ではなく、あるものの名辞とそれと同じものの別の名辞との関連を知りうるにすぎない。それ故、論究が言葉で表わされて、語の定義から始まり、語の結合によって一般的断定にすすみ、更にこれらの結合によって三段論法に進むという場合に、終結、即ち最後の総計は結論 (conclusion) と呼ばれる。こうした性格をもった知識が科学と呼ばれるのである。

しかしながら、このような論究の最初の基礎が定義の上に置かれていなかったり、或いはそれらの定義が三段論法を作るに際して正確に結合されていない場合には、その終結即ち結論は再び意見になってしまう。つまり、ある人によって述べられたことが真実だと主張されてい

たとしても、それが時に背理的で無意味な語で述べられていて理解不可能な場合には、それは真実についての意見にすぎないということである。

さて、科学ないしは哲学が政治的領域に適用されると、それは政治科学ないしは政治哲学と呼ばれる。そこで次の問題は、理性的推論に裏付けられた政治科学ないしは政治哲学が実際どのようにして平和という結果に到る過程を論証しようとしているのか、その依拠する原理と推論過程を簡略ではあるが、自然状態を中心にして具体的に追跡して明らかにすることである。つまり、いかなる原因としての原理が自然状態という結果をもたらしたのか、また、いかなる原因としての原理が自然状態を脱出させて平和という結果を導くのかということを解明することである。

ホッブズは、出発点としての最初の原因を人間の至福 (felicity) に求め、それを原理として確定した。ホッブズは至福を次のように定義する。「至福とは一つの対象から他の対象への意欲の継続的な進行であって、前者の獲得はなお後者への過程にすぎない。この原因は、人間の意欲の目的が一度きりの、或いは一瞬だけの享受にあるのではなく、彼の将来の意欲の辿る道を永遠に確保することにあるからである¹⁵⁾。」つまり、人間とは絶えず生命活動の拡大を求めている存在であって、至福とは生命活動の最大発揮と満足を意味しているのである。この至福を求める人間の意欲は次から次へと力を求め、止むことなく、休止することなく続き、死によってのみ消滅する。この原因は、必ずしも人間が既に得ているものよりもより強烈な歓喜を望むということではなくて、また、彼が並の力に満足することができないということでもなくて、彼が現在所有している安楽に生きるための力と手段を確保しうするためには、それを更にそれ以上獲得しておかなければならないからである。第二の原理として力 (power) が確定される。力とは近い将来に明らかに善になると思われるものを獲得するために、彼が現在有している手段のことである。こうして、人間は至福を与えてくれるものを善と見なし、それを力によって獲得しようとする。ここから、自然状態というカオスたる結果がもたらされ、ホッブズはそれを戦争状態という内容をもった原理として確定する。つまり、人間の本性のうちに潜む闘争の三つの主要な原因、即ち競争、不信、誇りと人間相互間の身心の能力の平等 (肉体的力における平等と推論能力たる慎慮における平等) とが相まって、万人の万人に対する戦争状態である自然状態が惹き起こされる。この自然状態においては暴力による死の危険が存在する。この危険を免れ、生命の安全を確保するための手段があり、それによって自然状態から脱出することが可能となる。ホッブズはそのための原理を二つ確定す

る。一つは、情念の中での最強の情念である暴力による死への恐怖心であり、もう一つは、理性的推論である。前者は平和を求める気持を生み出し、後者は人々が同意する気になれるような平和の諸条件、即ち自然法を示唆する。こうして、人々は国家状態へと移行して、平和を樹立していくのである。

以上、ホッブズの科学ないしは哲学の方法を検討し、その具体的問題への適用の有様を明らかにしたが、最後に理性によって経験を克服するという問題の意義について考えてみたい。つまり、正確な定義の必要性という問題については自然状態論を取り上げることによって、また、正確な推論の必要性という問題については自然権論を取り上げることによって、この問題の意義を考えてみたい。

ある事柄についての疑うことのできない、完全な理解、即ち真理に到達するためには論理的徹底化という気構えが必要であって、それは経験に基づく因果関係についての知識、即ち慎慮、予見、知恵といったものによってではなく、理性に基づく因果関係についての知識、即ち正確な定義と推論に基づく学問たる科学ないしは哲学によって可能となる。前者は必ずしも論理的徹底化を要求しないものであって、我々を中途半端な位置に押し止めて完全な理解へと到達させてはくれない。なぜならば、それは感覚に由来し、しかも人間は感覚に欺かれやすい存在だから、そこで見出された因果関係についての認識は不確かだからである。これに対して、後者は感覚ではなくそれ自身の原理と方法に依拠しているから、そこで発見された因果関係についての認識は確かであり、従って完全な理解へと到達させてくれる。このような理性に基づく論理的徹底化は、通常は我々によって見て見ぬ振りをされているか、或いは見過ごされている「事実」たる原理から出発し、推論によってより高次の段階の原理へと次々にすすみ、最後に最終的な原理に到達することによって遂行される。論理は経験が織りなす因果関係についての認識の網の目を破り、経験的世界の厚い壁を突き破って、真理の発見の旅に向って飛翔していかねばならない。

まず、正確な定義の必要性という問題については、論理的徹底化という立場から自然状態論を取り上げて検討することにしよう。

「自然状態」とは経験的に観察され、知られた「事実」ではなく、自然学的に、即ち科学的に発見され、知られた「事実」である。それは確かに現実に行った内乱を反映し、そこから得られたイメージの影響を受けていることに間違いはないが、内乱そのものとぴったりと重なってしまうわけではない。なぜならば、万人の万人に対する戦争という状態——文字通り万人が個々人に解体して一対一で互いに戦い合うという状態——は、現実にはま

ず生じえないからである。それは論理的な思考実験の産物であって、人間が激しい情念に駆り立てられ、自らの意見を善悪の判断の基準として行動すると想定した場合に、論理必然的に人間が陥る状態を示したものである。換言すると、論理的徹底化の意図の要請に従って提起され、理性によって発見されたものがホッブズの「自然状態」であって、その意味ではそれは論理的に作り出されたものという性格を有している。完全な理解に向って論理的徹底化が自らをおすすめしていく上で必要とし、依拠すべき「事実」として確定した原理が「自然状態」なのである。事実とは、経験によって見出される経験的事実と、理性によって発見される理性的事実に分けられる。後者は抽象化された事実でもあって、学問が依拠すべきはこの事実である。従って、理性的事実は経験的事実よりも、更にはいわゆる歴史的事実よりも、もっと深く、徹底化されて把握された事実なのである。ここには真のリアリティとは何か、そしてそれはどのようにして把握することが可能なのか、という問題への解答が示唆されていると言ってよい。ホッブズの場合、理性とは基本的には推論能力を意味しているが、ここではむしろそれは洞察力とか、判断力とかいった意味を与えられていると言ってよいだろう。こうして、言ってみれば、ホッブズは論理上、自然状態を徹底化して捉えることによって、人々に代って自然状態を極限にまでつきつめて、その中で行動してみせた。そして、それによって自らの行動の論理的帰結を不十分にしか自覚しない人々の前にその究極の帰結を示したのである。こうした意味を与えられた「自然状態」は、疑うべからざる「事実」であって、人間の経験に訴えての論証を第一義的には必要としないのである。

次に、正確な推論の必要性という問題については、同様に論理的徹底化の立場から自然権論を取り上げて検討することにしよう。

人間は自己の利益を赤裸々な暴力によって主張する場合もあるが、通常はむしろそれを権利の名で正当化して主張するものである。この事実と関連してホッブズは、人々がこの権利意識を徹底的に深化して抱くように期待している。なぜならば、単なる暴力による闘争の次元から権利の闘争の次元へ移行すれば、そこでは権利は各人の私的な理性によって正当化されるから、理性的推論の立場からそのような理性による権利の主張の論理的帰結を吟味して批判するという地帯を開くことが可能になるからである。こうして権利をめぐる争いの議論を理性的議論の水準にまで質を高めて、自己の権利の絶対的な肯定が他者による自己の権利の絶対的な否定という結果をもたらしてしまうという論理的背理に陥ることが論証されるならば、人々は否応なしにその背理を承認せねばな

らなくなり、自然状態から国家状態への移行の必要性和必然性が誰の目にも明白になってくるはずである。従って、自然状態から国家状態への移行の必要性和必然性は、権利意識に媒介されて気づかれるようになる。権利意識を抱き、それを徹底的にどこまでも主張していけばいくほど人々はその背理性を覚り、共通の規範の必要性和必然性を思い知らされて、国家状態への移行を切望するようになるのである。

こうして理性によって経験を克服するという問題の意義が、正確な定義と推論の必要性という二点において、論理的徹底化という観点から明らかにされた。ホッブズという希有の人物が一般人に代って示したかったことは、このことだったのである。かくして我々は、ホッブズの論理的帰結を躊躇なく受け入れるよう理性の上で、ホッブズから要請されているのであって、ここにホッブズにおける理性の命令的性格を窺うことができるのである。

三. 理性と経験の接点

前章で考察されたように、ホッブズにあっては理性と経験との断絶ないし乖離、換言すると理性的推論と経験的推論たる慎慮とを明確に区別すべきこと及び前者の後者への優越性が主張されたのであるが、それでは両者はどこまでも相対立したまま平行線を保ち続けるのであろうか。ホッブズ自身は前者を行う能力を有しているという点はさておいて、ホッブズによれば「自らの努力」によって、或いは「指導と訓練」によって一般の人々も高度な推論能力を獲得することができるとされているから、前者を行使する可能性が万人に与えられているし、実際にそれを獲得する道が開かれているということになる。そこで、理性と経験の接点という問題、即ち何を契機として人間は経験的推論の軌を脱して理性的推論の場へと参入することができるようになるのか、という問題をこの章で検討することにしよう。そのような契機となりうるものは、人間の経験のうちにあって、しかも経験を越え出ているような、そのような両面的性格を合わせもっている人間の知的能力でなければならない。

この問題を検討するためには、『リヴァイアサン』第一部、第八章、「普通に知的と呼ばれる諸徳及びそれらと反対の諸欠陥について」の箇所を見るのが適当である。¹⁶⁾

人間は他人よりも際立って勝っている精神的能力たる優れた知力 (good wit) をどのようにしたら手に入れることができるのであろうか。ホッブズは知力の分析から出発する。知力には、生まれつきの知力と獲得された知力との二種類がある。後者は方法と指導によって獲得される推論能力のことであり、それは言葉の正しい使用に基づいて学問を生み出す。前者は方法や教養や指導なし

に、慣習と経験によって獲得された知力のことである。生まれつきの知力は、一つの思考と他の思考との速やかな連結である想像の迅速さと、ある承認された目標への確固たる指向とからなる。これに対して想像の遅さは精神的欠陥であって、愚鈍と呼ばれる。この速さの相異は人々の好悪の対象が人によって違うという、人々の情念の相異に起因する。従って、ある人々の思考はある方向へ走り、他の人々のそれは他の方向へ走るから、人々はその想像を通過するものに様々な仕方であてられて、それらを様々な観察する。そして、人々の思考がこのように継続している時、人々が思考するものについては、それらがどんな点で似ているのか、又は似ていないのか、何の役に立つのか、どのようにしてその目的に役立つのか、ということ以外には観察すべきものはない。

こうして、これらのものの類似点が他人によって極めて稀にしか観察されないならば、その類似点を考察する人々は優れた知力をもっていると言われ、それは優れた想像力 (good fancy) を意味する。これに対して、それらのものの相異点と非類似点を観察することはあるものと他のものとを区別し、識別し、判断することであるが、それが容易なことではないとすれば、それを行う人は優れた判断力 (good judgment) をもつと言われる。想像力は判断力の援助なしには徳としてすすめられないが、判断力は想像力の援助がなくてもそれだけで徳としてすすめられる。つまり、ものとの相異点を識別する知的能力としての判断力が、ホッブズによって高く評価されていることがここから理解されよう。

さて、優れた詩においては判断力と想像力とが共に必要とされるが、しかし想像力の方が卓越していなければならない。詩は誇張によって喜ばれるものだからである。優れた歴史書においては判断力が卓越していなければならない。というのは、歴史書が優れているかどうかは方法が正しいか、真実を伝えているか、そして知られることが最も有益な行動を選択しているかどうかにかかっているからである。賞賛の演説や罵言においては想像力が優越している。なぜならば、そこで企図されているのは真実ではなくて、ほめたり、恥づかしめたりすることであるからである。従ってそれは上品な、或いは下品な比喻を用いてなされる。勧告と弁護においては当面している企図に真実が最も役立つ場合には判断力が、欺瞞が最も役立つ場合には想像力が、必要とされる。論証と討議及びすべての厳密な真理の探究においては、判断力だけで十分である。例外的に、時には何か適切な類比によって理解の端緒が開かれる必要があり、その場合には想像力が大いに役立つ。しかし、隠喩はこの場合、完全に除外される。というのは、隠喩は公然と虚偽であることを表明しているから、それが討議や推論の中に入り込むのを

認めるのは明らかに愚かだからである。また、いかなる議論においても判断力の欠如が明瞭であるならば、どんなに想像力が奔放であったとしても、その議論全体は知力に欠けているものとして受け取られる。こうして、知力が欠けている場合に、そこに不足しているものは想像力ではなくて判断力であって、それ故、判断力は想像力がなくとも知力たりうるが、判断力を伴わない想像力は知力たりえない。

ある意図を有する人の思考が多数のものを見渡して、それらがその意図にいかに関立つか、或いはそれらがいかなる意図に関立つかを観察する場合に、彼の観察力が並々ならぬ普通以上のものであれば、彼のこの知力は慎慮と呼ばれる。それは、以前の同様なものとそのなりゆきに関する多くの経験と記憶を基にして獲得される。これについては、人々の間に想像力や判断力に関するほど大きな差異はない。なぜならば、同年輩の人々の有する経験は量的には大した違いはなく、ただ各人はそれぞれ自分の意図をもっているために経験を積む機会が異なっているにすぎないからである。一家を立派に治めることと王国を立派に治めることは、慎慮の程度の差異ではなく仕事の種類の相異にすぎない。一介の農夫も自分の一家のことについては、枢密顧問官が他人の事柄に関するよりも余計に慎慮を有しているものである。

ところで、以上に挙げられた知力の差異の原因をホッブズは情念の相異に求める。情念の相異は一部には身体の素質の相異から、一部には教育の相異から生ずる。というのは、もしもこの差異が頭脳の状態や内的、外的の感覚器官から生ずるとするならば、想像力や判断力の差異と同程度に、視覚や聴覚やその他の感覚にも差異が生ずるはずだからである。従って、この差異は情念の相異から生じ、情念は人間の気質の相異によってだけでなく、慣習や教育の相異によっても異なってくる。何よりも知力の差異を惹き起こす情念の相異は、主として力や財産や知識や名誉に対する大小の欲求の差に原因があり、それらはすべて第一の、力への欲求の差にその原因を帰すことができる。

以上の考察から言えることは、厳密な真理の探究には判断力だけで十分であるというホッブズの言葉に表われているように、優れた人間の知的能力たる判断力が理性と経験の接点をなして、これを経由することによって我々は経験的推論の軀を脱して理性的推論の場へと参入することができるようになるということである。それが真に優れたものであることによって、経験のうちにありながら経験を越え出ているような、両面的性格をもった知力たる判断力は、あるものと他のものとを区別し、識別し、判断する能力であった。他方、理性的推論における正確な定義とは、何を確定要素として決定し、原理

として定めるかということの意味していた。従って、判断力とは正確な定義を行うために必要な能力であると言えることができるのである。

既にホッブズは、トゥキディデースの著作『ペロポネソス戦争史』翻訳の中で「歴史の主要な真の仕事は、過去の行為の知識によって現在においては思慮深く、未来に対しては先見の明あるように人々を教化し、能力を与えることにある¹⁷⁾」と述べ、歴史の先例の中に現在と将来への教訓を見出そうとしている。思慮、先見の明は歴史を基にした推論能力のことであるから、これを歴史的推論と名づけることにしよう。かくして、経験的推論たる慎慮から歴史的推論へ、歴史的推論から理性的推論へという一連の過程は、ものごとの因果関係における確実性を獲得するための探究過程であったと見ることができる。この過程において正確な定義を設定するのに貢献して、因果関係についての最終的な確実性に到達する橋渡しの役割を演じたのが判断力である。そして、判断力はホッブズによって歴史書を著す際の不可欠な能力だとされていることからすると、ホッブズ自身の判断力も優れた歴史書を読むことによって大いに培われ、研ぎ澄まされたに違いない。こうして、ホッブズの理論においては、経験の全面的否定という断絶を経ることによってではなく、むしろ経験と理性とを連続的に捉えて、両者を架橋する要因を発見し、それによって経験を越え出ていこうとする意図が見てとれるのである。

先に私は、正確な定義と推論に基づく理性的推論による論証は、第一義的には経験による証明を必要としないと述べたが、第二義の意味ではホッブズは経験による裏付けの必要性を主張している。つまり、ホッブズの学問的論証を受け入れて貰うための一般人への説得は、結局のところ経験的事実に基づく承認に訴えてなされている。自然状態が戦争状態に外ならず、そこには暴力による死及びその他の様々な障害があることを容易に理解しようとはしない人々に向って、ホッブズは「これらの事柄を十分に考慮したことのない人々は……情念を基にしたこの推論を信ぜず、それが経験によって確認されることを望むであろう¹⁸⁾」と述べ、人が旅行する時に武装すること、家の中で金庫に鍵をかけることなどの具体例を挙げて、人々が自分の経験に照して納得するように意を用いている。

ホッブズが人々の経験に訴えて納得して貰おうと試みた理由は、実は彼が彼の学問的論証を人々がどうしても理解しえないのではないかと、その理解能力を懸念していたからに外ならないであろう。その意味では、彼の学問はホッブズという天才によって樹立されたものであって、それが第一義的には理性に対して、第二義的には経験に対して、我々がそれを受け入れるよう要請ないしは強要してきているということになる。しかしながら、経

験に基づく証明がホッブズにとっては第二義的な意味しか有していないとしても、現実を経験の世界に生きている一般人にとっては、むしろ第一義的な意味を有しているのであって、つまるところホッブズもそのことを理解していたと思われる。それは、本来のホッブズの立場からすれば彼の現実への譲歩であったのかもしれないが、けれどもそれは必要な譲歩であった。なぜならば、ホッブズの理論においては秩序を構築する本人は人々自らであるとされているから、論理上、彼の理論は人々に受け入れて貰う必要があったからである。

四. 結 論

「コモンウェルスの目的や性質を徹底的に究明したことも、また、正確な理性で比較考察したこともなく、それについての無知から生ずる悲惨な状態に日々苦しめられている人々の実際の見地からだけの論証は、妥当性をもたない。(中略)コモンウェルスを作り、それを維持する技術は、算術や幾何学がそうであるように確実な規則によるのであって、テニスのように実地だけによるものではない。この規則は貧乏人達は見出す暇がなく、たとえ暇のある人々でもこれまでそれを見出すための好奇心や方法をもったことがなかったのである。¹⁹⁾」

ホッブズは、最初に確実な学問たる科学ないしは哲学を身につけた者としての誇りと自信をもって、これらの人々に代って国家の目的や性質を論証していった。その意味で、理性のもたらす成果に大いに期待をかけたホッブズは人々に対する、更には国家に対する助言者としての役割を自覚し、それを担ったと言うことができよう。助言者の役割とは、助言を受け取る者にある行為の帰結を真に、明白に知りうるような仕方ですること、即ち自分の助言を、真実を最も明白に表現しているような形の言葉にして提案することにある。それでは、助言者としての資格を保証する能力とはどのようなものであろうか。「助言する能力は、経験と長年に亘る研究の結果から生ずるものであり、いかなる人も大コモンウェルスの運営のために知っている必要のある、すべての事柄について経験を有しているとは考えられないから、いかなる人も彼が十分に知り尽くしているだけでなく、十分に省察し、考察してきた仕事についてのみ、立派な助言者たりうると考えられる。(中略)助言に必要な知力とは……判断力である。そして、この点についての人々の間の差異は、それぞれの種類の研究や仕事について、人々がそれぞれに受けた教育の差異から生ずる。もしもあることを行うための無謬の規則(機械や建物における幾何学の法則のように)があるならば、世界中のあらゆる経験をもってしても、その規則を学んだ者、或いは発見した者の助言

に匹敵しない。こういう規則がない場合には、それぞれの性質をもった仕事に最大の経験を有する者が、それについての最善の判断力を有し、従って彼が最善の助言者なのである。²⁰⁾」こうして、助言者として必要な能力をもち、それ故人々に対して助言する資格を備えたホッブズは、正確な定義と推論に基づく科学ないしは哲学を樹立し、それによって平和の確立に到る一連の過程を論証してみせたのである。

ところで、ホッブズが自らの論証結果を人々に受容させる上で厄介な問題がある。それは、本当に人々がそれを理解するだけの能力を有しているのかという問題である。勿論ある箇所では、ホッブズは一応人々がそのような理解能力を有していることを認めている²¹⁾が、彼が心底それを承認していたかは疑わしいと思われる。なぜならば、彼の関心と期待はエリートの養成機関とも言うべき大学に向けられていくからである。つまり、ホッブズの樹立した学問たる科学ないしは哲学に基づいて大学における青年達を正しく教育することによって教化し、その青年達に一般の人々への教導を行わせようというのである。こうして、大学の効用に触れた後、ホッブズは自己の学問が大学で教えられることの意義について、次のように総括している。

「結論として言えることは、この論究全体の中には…私に考えうる限り、神の言葉にも良俗にも反するものはないし、それに公共の静穏を乱すものもないということである。従って、私はそれが印刷されるのが有益だと思うし、また、諸大学についての判断を下す地位にある人々がやはりそのように考えるならば、諸大学で教えられるのはもっと有益だと思う。というのは、諸大学は社会的及び道徳的諸学説の源泉であって、そこから説教師やジェントリーが見つけた次第に水を汲んで、それを人々の上に降りかけるのを見れば、諸学説が異教の政治家の毒液や欺瞞的な霊の呪文から純粹に保たれておくように大きな注意が払われなければならないからである。そうしておけば、大抵の人々は彼らの義務を理解するから、少数の不満をもっている人々の野心に奉仕して国家に反対する傾向が少なくなるし、平和と防衛に必要な貢納を支払うことについて不満を抱くことが少なくなる。それに、統治者自身は外敵の侵入や侵犯に対して、公共の自由を確保するのに必要であるよりも大規模な軍隊を共通の負担で維持しなければならない理由が減少するのである。²²⁾」

けれども、自らの教説が大学で採用されて教えられるということだけでは十分に安心することができなかったであろうか、ホッブズは最後に自己の教説が最高の権力者たる主権者の後楯によって実行に移されることを期待するに到った。²³⁾この点にも、一般の人々の理解能力に対する悲観的な見方ないしは苦い思いが、どこまでもホ

ップズにつきまとして離れなかったことが暗示されているように思われる。

正確な定義と推論というホッブズの学問的方法論の有する意義は、ホッブズの生きた時代の終焉と共に終ってしまったわけではない。それは、状況は異なるとはいえ、我々の生きているこの現代社会においても、我々が権利をめぐる争いを自ら解決して平和を樹立しなければならぬという課題に直面した場合には、採用して依拠すべき学問的方法論なのであり、その意味でそれは堅固な礎石としての普遍的意義を保ち続けているのである。まことに、偉大な思想の放つ輝きは我々を魅惑し、圧倒してやまないのである。

註

- 1) ホッブズが経験的推論という言葉を使用しているわけではない。理性的推論という言葉に対して慎重を便宜上、私はそう呼ぶことにしたのである。
- 2) テキストとしては邦訳『リヴァイアサン』（世界の大思想13, 河出書房）を使用した。訳は原典, The English Works of Thomas Hobbes of Malmesbury, III, 1962 を参照してかなり改めた。原典については以下, E. W. IIIのように略記する。邦訳の頁数と原典のページ数とを併記する。ただし、邦訳のない原典についてはそのページ数のみを示す。 36頁。p. 37.
- 3), 4) 451~452頁。p. 664.
- 5) 454頁。p. 668.
- 6), 7), 8) E. W. II, p. xiv.
- 9) I bid., p. 16n.
- 10) 11頁。pp. ix~x.
- 11) 448頁。p. 658.
- 12) 以下、註の14の箇所までの叙述がこの部分に該当する。13~37頁。pp. 1~38.
- 13) 23頁。p. 17.
- 14) 以下の叙述は37頁から47頁までが該当する。pp. 38~53.
- 15) 67頁。p. 85.
- 16) 48~52頁。pp. 56~61.
- 17) E. W. VIII, p. vii.
- 18) 85頁。p. 114.
- 19) 139~40頁。pp. 195~96.
- 20) 172頁。pp. 246~47.
- 21) 次のように述べられている。「一般の人々の精神は権勢家に依存して感染されていたり、彼らの博士達の意見が書きなぐられていたりしなければ、白紙のようなものであって、公的權威によつてはつきりと刻印されるものをすべて受け入れるのに適している。」 222頁。p. 325.
- 22) 483~84頁。pp. 712~13.
- 23) 「私の希望とは、この著作がいつかある主権者の手に入つて、彼がそれを私心のある嫉妬深い解釈者の手を借りずに自ら考察して、……それを公共的に教えるのを保護するために、全主権を行使することによつて、この思索における真理を実際的に効用あるものに転化させるかもしれないという点にある。」 242頁。p. 358.